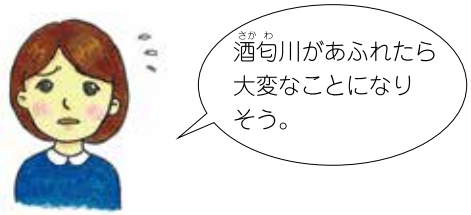
2 水害をふせぐ

酒匂川の水害は，どんなようすだったのでしょう。

酒匂川の水害

ふだんの酒匂川(2011 年９月さつえい)

大雨がふった後の酒匂川（2010 年9月8日さつえい）



酒匂川は，富士山や丹沢の山々のふもとから流れ出したたくさんの川（支流）の水を集め、足柄平野の中央を流れています。その水は米づくりや水道水などに利用されています。

この川は，川はばがおよそ200ｍ～300ｍと広いわりに，ふだんは水かさが少なく，河原が多く目立ちます。人々の生活をささえてきた酒匂川ですが，ひとたび大雨がふり続くと，急に水かさがふえて，川はばいっぱいにものすごいいきおいでうねりながら流れる川に変わります。このように，酒匂川は，変化のはげしい川としても知られています。

むかしの酒匂川

江戸時代の酒匂川は、大雨が続くと，ていぼうがよく切れて，こう水となりました。そのたびに田畑はあらされ，ひどいときには，人や家まで流されました。このような酒匂川のこう水は50回以上もあったといわれています。

大口土手（文命堤）のこう水〈南足柄市〉

水害は，人々の生活や土地のようすをどのように変えてしまったのでしょう。

大口土手（文命堤）のこう水〈南足柄市〉

このていぼうは，今の南足柄市にあり，およそ400年ほど前に（小田原城主の大久保氏によって）つくられ，大口土手といわれていました。

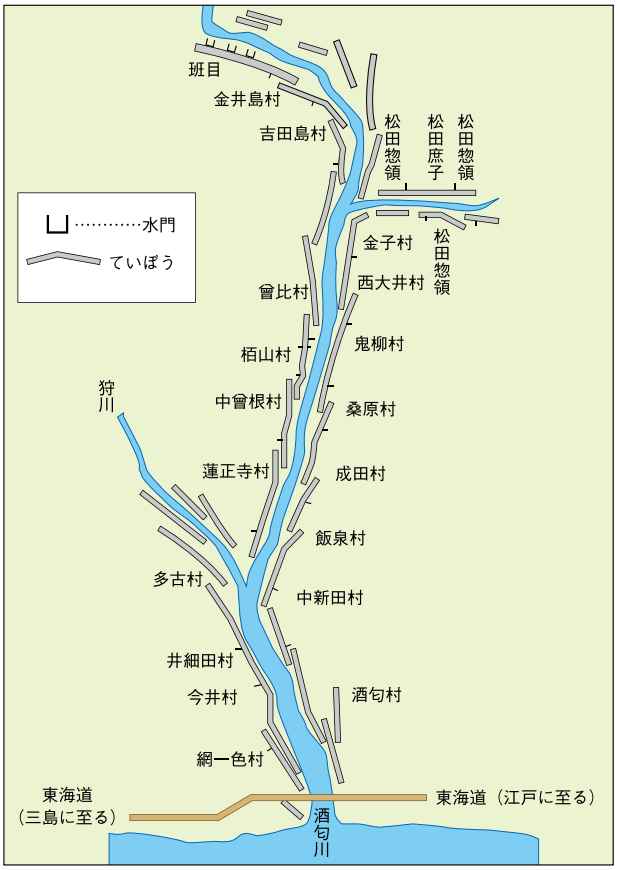
この土手が大水で切れると，川の西がわの21の村が水害をうけ，東がわの16の村は水不足になって，米づくりができなくなり，人々が苦しむもとになっていました。この土手は酒匂川でとくに重要なていぼうと言えます。

今から300年ほど前（1708年）の大こう水は，とくにひ害が大きく，６つの村が流され、酒匂川の川ぞこになってしまうほどのひどさでした。このため，やく500けん，およそ2800人の村人たちは，家と田畑を失い，約20年間もよその村でひなん生活をおくることになってしまいました。人々はそまつな小屋に住み，また，ひなんした所には，前の年にふん火した富士山からの火山灰がたくさんつもっていたので，畑をつくるのもむずかしく，食べ物にもとてもこまりました。

不自由な生活をつづけ苦しむ人々は，そのようすを江戸（今の東京）の幕府の役人にうったえています。

新大口橋から見た文命東堤とその上に建つ福沢神社（大口土手）

文命東堤を守る役わりをする上流の文命西堤（がらせ土手）



酒匂川の流れにそってきずかれたていぼう
（「とみず子ども風土記」より

年	主なできごと
1700 年	大こう水となり，ていぼうが切れてこわされる。
1703 年	南関東いったいに強い地しんが起こり，小田原にも大きなひ害が出る。
1705 年	大こう水となり，ていぼうが切れてこわされ，川岸の田畑が流される。
1707 年	富士山，大ふん火。火山灰により大きなひ害が出る。
1708 年	大雨のため大こう水となり，火山灰をおし流し，大きなひ害がでる。
1711 年	大こう水となり，大口土手もこわされる。田畑も多く流される。
1725 年	大こう水となり，ていぼうが切れてこわされる。
1726 年	田中丘隅，幕府の命令で，大口土手を文命堤につくりなおす。
1731 年	大水のため，16 の村がひがいを受ける。 西大井，鬼柳，桑原，成田の４つの村のひ害が特に大きい。 （三角土手のこう水）
1791 年	大こう水となり，ていぼうがこわされ，川岸の田畑が流される。 （川下のこう水）
1802 年	大こう水によって，西大井～飯泉の村々がひ害を受ける。

さらに，1711年には、大口土手が切れる大こう水がおきました。あまりのひ害の大きさに，幕府は，川崎の田中丘隅という人に命じて土手をつくりかえ「文命堤」と名づけました。しかし，しばらくすると，これも切れてしまうほどのこう水（1734年）が起きて，土手をつくり直さなければなりませんでした。その後，この土手は切れなくなりましたが，これよりも下流の土手がよく切れて，村々に大きなひ害をもたらしました。

幕府とは？

将軍が中心となって政治を行うところ。
このころは江戸に幕府があったので、江戸幕府とよばれました。

三角土手

三角土手のこう水

この土手は，川音川が酒匂川と合わさる所にあって，川の東がわの村々は，近くから水を取り入れて米づくりに利用していました。

今からおよそ280年ほど前に起きたこう水では，ここから鬼柳村までのていぼうが切れて，16の村がひどいひ害をうけました。特に西大井，鬼柳，桑原，成田の４つの村は，田や畑ばかりでなく家まで流され，あれ地となってしまいました。村の人々は近くの村でくらしましたが，食べものも着るものも十分でないくらしに，なやみ苦しみました。

そこでかつやくしたのが蓑笠之助という人でした。田中丘隅のあとをついで酒匂川の工事をまかされた蓑笠之助は，川音川と酒匂川の合流点の東側に大きな土手をつくる工事の中心となりました。この大きな土手が今の三角土手のきそとなり，川の東がわの村々がこう水にあうきけんがへりました。

水害を防ぐため、人々はどんな努力をしてきたのでしょうか。

川下のこう水

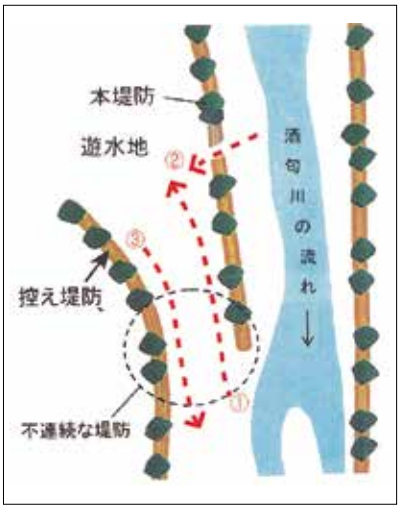
江戸時代になり，酒匂川の両岸にはていぼうが多くつくられるようになりました。しかし，ひとたび大雨がふり続くと，村々の人はみんなで協力して，ていぼうが切れないように守らなくてはなりませんでした。

今からおよそ220年ほど前の1791年の大水の時には，多古のていぼうが切れて，多古，井細田，池上，中島，今井，町田，山王原の村々が水害をうけ，人々のくらしがおびやかされました。

また，この時，栢山のていぼうも切れてしまい，あたり一面の田畑は水びたしになってしまいました。しかし，その後，村の人たちは力を合わせて，ていぼうをなおす工事にとりかかりました。その中には，二宮金次郎もいました。まだ少年だった金次郎も，村の力になろうとこれにくわわって仕事をしたといわれています。

大水のいきおいでていぼうがくずれそうになると，竹であんだ細長いかご（じゃかご）に石をつめて土手にならべたり，土手にはえている木を切って，川の強い水の流れにあてたりしました。しかし，あまりにも水のいきおいがはげしく，ふせぎきれずに，ついに土手が切れてしまうこともありました。

そこで，ていぼうのところどころに切れ目をつくり，二重にかさなるていぼう（かすみ堤ともいいます）をつくっていきました。こうすることによって，ていぼうにそっていきおいよく流れてきた水は，切れ目にくると力がちらばっていきおいがよわまり，ていぼうとていぼうの間に流れこんで大きなよどみ（水たまり）をつくります。このようなよどみをいくつかのていぼうの間につくって，川の流れのいきおいをよわめる工夫をしました。



「足柄歴史新聞　富士山と酒匂川」
（足柄歴史再発見クラブ　より）

かすみ堤のしくみ

①酒匂川に大水が出ると，かすみ堤（二つのていぼうの間）に水が入ってきます。（遊水池になります。）

②川に近いていぼう（本ていぼう）をこえてきた水も遊水池に入ってきてたまります。

③酒匂川の水がへってくると、遊水池に入った水は川にもどっていきます。こうすることで，こう水などのひがいを少なくすることができます。

今でもこのようなていぼうは，酒匂川でいくつか見ることができます。また，最近の台風などによる大水の時にもその役わりをはたしています。

このように，水を治めるたたかいが，私たちのそ先の知えと努力によって，むかしから続けられてきました。しかし，一方で，生活にめぐみをもたらす川としての酒匂川を大切にしてきました。

今も見られる酒匂川の二重堤防（かすみ堤）

東富水小学校南側にある「かすみ堤」
写真右側の松があるあたりが本ていぼうとなっていて，そのむこうに酒匂川が流れています。写真左側の松があるあたりが，ひかえていぼうになっています。写真中央には小田原アリーナが見えます。

報徳橋上流の城北工業高校北側にある「かすみ堤」。二つのていぼうの間は田や畑になっています。

開成町足柄大橋近くの「かすみ堤」。足柄大橋の下に，ていぼうの切れ目があります。

酒匂川を歩いてみよう

酒匂川ぞいを歩いてみると，私たちのそ先から今まで，酒匂川とともに生活してきたことがわかるものにたくさん出会います。

酒匂川の近くや土手には，さまざまな時代のさまざまな人がたてた石碑やお地蔵様，水神様があります。それらには，酒匂川のこう水の苦しみをのりこえようと努力し，安全で安心した生活をのぞんだ当時の人々の強い願いがこめられています。

みなさんも近くにあるお地蔵様や水神様にこめられたねがいや，石碑にきざまれた地いきの歴史を調べてみてはどうでしょうか。

大口（文命東堤）のお地蔵様

開成町のお地蔵様には，どうして顔がないのかな。

開成町祖師堂のお地蔵様

こう水のたびに流されて，けずれてしまったようだよ。それでも，地いきの人から，とても大切にされてきたんだね。

中曽根のお地蔵様

私たちの学校の近くにもお地蔵様があるのか探してみよう！

蓮正寺の水神様

足柄大橋付近の治水碑

今でも続けられている水害をふせぐための努力

酒匂川ぞいを歩くと，いたるところで石がたくさん積んである場所を目にします。これらの石は，大水の時にていぼうを守るためにつかう石です。今も水害をふせぐためのさまざまな努力が続けられています。

3 流れをかえた川づくり《久野川・山王川》

人々の水害をふせぐための工夫を探してみよう。

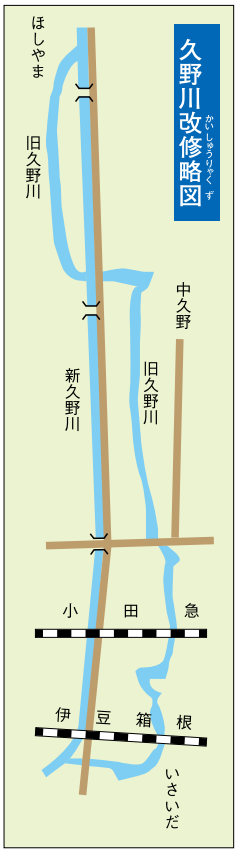
久野川の川づくり

昔の久野川は，曲がりくねって流れていました。大水になると，たびたび水害をおこして田畑をあらし，村の人々を苦しめてきた川でした。

今からおよそ100年前(1923年)に，関東大震災がありました。家や道などがこわれただけでなく，川のていぼうもくずれてしまったので，村の人々は，久野川耕地整理組合をつくり，これをなおす工事に取りかかりました。

工事は，1924年12月に始まり，７か月ほどで完成しました。川になるところを２mほり下げて，長さおよそ２kmのまっすぐな新しい川をつくっていきました。ほり出された土や石は，昔からの川のうめ立てやていぼうづくりに使いました。

この工事で苦労したのは，費用のことでした。国から出るお金がへらされたため，足りない分は銀行からお金をかりて，組合の人たちはそれを毎年返していきました。



なおす前と後の久野川を図で示した碑の模写図

そのため，役員の人たちはとてもつらい思いをしてきました。

左の写真は，兎河原橋のたもとに置かれ，川づくりに努力した先人を伝える碑です。その碑には，川のはんらんに苦しめられてきた歴史と，新しい川づくりに立ち上がり完成させた先人のがんばりがかかれています。また，曲がりくねった昔の久野川と，直線状になおされた新しい久野川とが図で示されています。

久野川をなおした記念碑
(昭和 38 年にたてられました。)

その後の久野川は，水害の心配のない川になり，まわりの土地もひらけてきました。

今の久野川のようす▶

山王川の川づくり

久野川の下流の山王川も，昔は、曲がりくねって流れていたために，大水のたびにていぼうがくずれました。橋が流されたり，田畑があらされたりして，人々をこまらせた川でした。

この川も，関東大震災がきっかけとなって，村の人たちが山王川耕地整理組合をつくり，川と田畑の形をなおしていきました。工事といっしょに，道路や水路もなおす，村づくりも行いました。川づくりは、８か月ほどの工事で1925年に，田畑や道路・水路づくりは1927年に完成しました。

しかし，この工事にもたいへんな費用がかかりました。組合員は，工事費のやりくりと，川や田畑・道路や水路をつくりなおすのに必要な土地のやりくりに苦労と努力をかさねました。これがみのって，水害のない，形のよい田畑と道路がととのった，農業のしやすい地いきにかわりました。

なおす前の山王川の様子
（額田正平氏より）

今の山王川の様子
（神奈川県行政資料室より）

4 人々の幸せを願って

遺跡や博物館を見学して郷土の偉人について調べてみましょう。

二宮金次郎（尊徳）について

報徳二宮神社の尊徳像

善栄寺の尊徳像

このような像をどこかで見かけたことはありませんか。これは二宮金次郎の像です。

二宮金次郎は今から230年ほど前に栢山に生まれました。少年のころ，酒匂川のこう水で田畑が流されてしまいました。父母はその後の苦労などが重なりあいついでなくなってしまいました。

しかし，金次郎は希望を失わず努力を重ねて良く働き，まずしかった家をりっぱに立て直しました。

そして，全国で600ものまずしい村をゆたかな村につくりかえる仕事をなしとげるなど，人々の幸せのためにつくした人です。

金次郎は病気の父のかわりに酒匂川のていぼうを直す仕事に出ましたが，大人のように働けません。その分，夜にわらじをあんで村の人に使ってもらいました。また，松苗売りのおじいさんが売れなくてこまっているのを見て，金次郎は子守りでか

二宮金次郎（尊徳）の主な年表

西暦	年	主なできごと
1787	0	栢山村に生まれる
1791	4	酒匂川の大こう水で田を流される
1800	13	父利右衛門死す
1802	15	母よし死す
1806	19	田９畝を買いもどす
1811	24	家老服部家に仕える
1818	31	藩主大久保忠真に表彰される
1823	36	桜町へ移り立て直しを指導する
1829	42	成田山にこもる
1831	44	忠真に立て直しを報告
1837	50	小田原藩のききんを救う
1840	53	曽比村立て直しをする
1842	55	幕府の役人になる 利根川分水路測量調査をする
1843	56	尊徳と名のる
1853	66	日光領の立て直しをたのまれる
1856	69	日光市今市で死す

せいだお金で松苗を買いました。

そして「洪水がおきそうな時に，松を切りたおしてならべれば水の勢いを弱められるだろう。」と考え，酒匂川のていぼうに植えました。このように，少しでも人のためになるように考えて実行しました。

松苗を植えた坂口堤

菜種油で火をともし勉強する金次郎

13才で父を，15才で母をなくした金次郎は，おじさんの家にあずけられました。夜，勉強するには明かりに使うあんどんの油が必要です。そこで一握りの菜種を仙了堤にまいたところ，次の年の初夏には約7升（12.6ℓ）のしゅうかくがありました。それを菜種油に代えて勉強を続けました。

また，田植えの時にすてられた苗を拾い集めて，あれ地をたがやして植えました。

そして，秋には1俵（約60kg）を次の年には5俵の米をしゅうかくしました。「小を積んで大となす」（積小為大＝小さい事を積み重ねて，やがては大きいことを成しとげる）という尊徳の教えは，このような自然の力を生かす工夫と努力から学んだといわれます。

すて苗を植える金次郎

二宮尊徳肖像画

報徳博物館

博物館の館長さんの話

金次郎（尊徳）は小田原のとの様大久保忠真に，桜町領（今の栃木県真岡市）の立て直しを命じられました。そこの村々は，田畑もあれはて村人の心もすさんでいました。金次郎（尊徳）は家や田畑を売りはらい一家で桜町にうつり住み，村の立て直しに当たりました。まず，その村の土地のようす，水の便，気候，村人のくらしぶりをたんねんに調べました。そして，米の取れ高を調べて，との様に年貢（お米ではらう税）を低くおさえてもらい，余ったしゅうかくの分は村の立て直しに使うようにしました。そして，毎日まだ暗いうちから起き，村を回って早起きをすすめ，作物の育ち，田畑の様子を見て回りました。また，よく働く者には米や農具をあたえてほめ，村人のやる気を出させました。

また，自然のめぐみにかんしゃしその力を生かす努力の大切さを教え，むだをなくししゅう入にあったくらしをし（分度），あまった分をたくわえ世の中のため人のために譲る（推譲）生活をすすめました。

こうした苦労と努力の積み重ねにより，10年後には桜町はゆたかな村に立ち直りました。

桜町がりっぱな村に立ち直ったことを聞き，各地より農村の立て直しの方法（仕法といいます）を学びに人々が集まりました。金次郎（尊徳）は多くの人たちを指導し，まずしい農村をゆたかにするために一生をささげました。

小田原領がききん（米が取れずうえに苦しむこと）の時，人々を救う働きをしました。そして，小田原でも，農村をゆたかにする仕事に取りかかりました。

曽比村では，冷たい地下水がわきだすために稲の育ちが悪く，村人は苦しんでいました。金次郎（尊徳）は，その冷水を取りのぞくために排水路をほらせました。この作業には老人も子どもも進んで参加したといいます。その結果，田の水の温度が上がり，今まで以上のしゅうかくをあげることができるようになりました。

報徳堀

このほか，二宮金次郎（尊徳）が人々のためにどんな働きをしたのか調べましょう。

二宮金次郎（尊徳）遺跡マップ

⑥二宮総本家跡

②二宮万兵衛宅

⑤善栄寺（金次郎お墓）

⑨報徳堀（曽比）

③捨苗栽培の碑

⑧松苗の碑

④油菜栽培の碑

①金次郎生家

①尊徳記念館